

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
大学院学生研究
2021年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 キリスト教学	研究科 キリスト教学	専攻
研究代表者 (2022年3月現在のものを記入)	在籍課程・学年	氏名	
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年	川越菜都美	
指導教員	所属部局・職名	氏名	
	文学部	廣石望	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	建国神話としての『ヤコブ原福音書』——「国家」「民族」的キリスト教イメージ——		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2022年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏名	
	立教大学キリスト教学研究科 キリスト教学専攻博士後期課程1年	川越菜都美	
研究期間	2021 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 184,031円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、建国者ないし民族の始祖たるマリアとイエスを提示した文書としての『原福音書』解釈を試みようとした。建国神話としての『原福音書』解釈を補助線として旧新約各書を再読した際に、ダビデの末裔、メシア、王といったモチーフ、および（歴史的・地理的表象ではなく）抽象的な概念として現れるエルサレムや神殿のイメージが、建国の祖としてのイエスイメージ、「国家」「民族」としてのキリスト教イメージをいかに強化し得るかを考察しようと考えた。本研究は、『原福音書』を前提として置くことで可能となる旧新約各書の解釈が、3-4世紀キリスト教の「国家」「民族」としてのアイデンティティ構築に影響を及ぼしたという仮説の提示を目的とした。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ マリア崇敬 } { 女性表象 } { 民族・国家 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 研究の背景と目標設定

『ヤコブ原福音書』(以下、『原福音書』)のマリアが、神の顕現の場、すなわち「神の箱」としての役割を果たしているという仮説を提示

神殿の祭司によるマリアへの「解放/離縁 (ἀπολύω)」(『原福音書』16:7) という処遇が、神殿からの「神の箱」喪失を示唆

「神の箱」たるマリア喪失後の神殿の権威は失墜し、代わってマリアがイエスを出産する洞窟が神の顕現の場と化す

上記の一連のダイナミクスにより、「古い民」と「新しい民」が立ち現れる

一方は悲しみもう一方は喜ぶ「二つの民」をマリアが幻視するエピソード(『原福音書』17:9)

『原福音書』16:7以降は、神殿に代わりマリアとイエスの行く先が民の中心となっている、この民とは旧来の神殿に従属する民ではなく、マリアとイエスに従う新たな「民」を指す

→イエスを信じないユダヤ人と、イエス(そしてマリア)を信じるキリスト者?

ここでは、キリスト者が「民族」として提示されている?

この、「民族」としてのキリスト教イメージは、『原福音書』のテキスト外にも存在

テオドシウスによるキリスト教のローマ国教化(392年)以前のキリスト者には、自分たちキリスト教を「民族」として規定する潮流が存在(Buell)

→この潮流を、キリスト教の共同体としてのアイデンティティ構築の試みと捉え、「民族の創始の神話」としての『原福音書』分析を試みる

2. 方法論の再検討——分析概念としての「人種」「民族」の定義の問題

初期キリスト教の研究において、「普遍的な宗教」か「民族宗教」かが、キリスト教とユダヤ教の分水嶺とされてきた功罪

【肯定的な側面】

「普遍主義」的と見られた新約各書・初期キリスト教文献の記述は、今日までキリスト教内部の、あるいは他宗

教における「人種」「民族」に基づいた差別的慣行に対する反対の根拠となった

例: アフリカ系アメリカ人による神学の聖書解釈は、人種の違いの超越を「本来」のキリスト教の在り方として定式化した上で、白人至上主義への批判を行った。

「神は人を分け隔てなさないことが、よく分かりました。どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです」(使徒 10:34-35) 「神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住まわせ」(使徒 17:26) 「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません」(ガラ 3:28) etc.

【問題点】

上記のような研究は、(その前身たるユダヤ教とは異なり?) 民族を超越した初期キリスト教は、「本来の」キリスト教の在り方から、時代が下がるにつれて「本来的でない形」へと移行する中で様々な差別を内包していったという史観に依拠する(キリスト教会の、人種差別・民族的抑圧への加担に対する説明)が……

・現代の概念としての「人種」「民族」「普遍主義」を古代の状況に無批判に適用してしまう。

・「本来の」キリスト教という幻想……初期キリスト教研究がしばしば陥ってしまう、「キリスト教はなぜ(ユダヤ教に比して)普遍化に成功したのか」、逆に「キリスト教はなぜ失敗した(差別を内包してしまった)のか」を初期キリスト教に見出す誤り

・「普遍主義」と「民族主義」との間の明確な区別を前提としている。

・皮肉にも、反人種差別の名の下に、反ユダヤ主義を温存しかねない。反ユダヤ的な過去の研究に無批判に立脚している。

→現代の我々が日常語として、ないしは分析概念として用いる「人種」「民族」という語と、古代におけるこれらに相当する語との差異を慎重に精査する必要がある。

また、キリスト教と(ユダヤ教を含む)それ以外の宗教の比較においては、近代以降の神学・宗教研究の方法論そのものが、キリスト教中心主義・植民地主義に立脚した面を持っていたことを念頭に置くべき?

研究成果の概要 (つづき)**【近代の発明としての「人種」「民族」】**

「人種」「民族」という語を古代の事象への分析に用いるアプローチにおいて無視できない点

- ・古代の人々が「人種」「民族」に当たる概念を用いて自己定義した歴史的背景
- ・現在の日常語としての「人種」「民族」概念による(研究者自身の)バイアス

人種と民族に関する我々の理解には、近現代史の特異な事情が避け難く横たわる (Buell)

人種の明確な定義は、主に現代のヨーロッパとアメリカの歴史における特定の歴史のおよび社会的状況の産物

そもそも、現代の概念としての人種と民族の定義は、ヨーロッパのキリスト教徒による植民地支配に立脚(生物学を植民地支配に援用、西欧を中心に発展してきた諸学問もこれに加担)

Martin Bernal “Black Athena” (1987)

「人種」は古典古代への分析概念として不適当

日常語としての「人種」の、生得的で不変であり、生物学に基づく、肌の色によって特徴付けられるという定義

→この定式化は、少なくとも現存する古代地中海のテキストには現れない

→古代への分析に「人種」概念を用いる不适当性、及び現行の差別の温存への懸念

17世紀以降ヨーロッパ人が定義した「人種」は、最初にまず聖書のノアの子供たちに関連して分類(セム、ハム、ヤペト)植民地支配の根拠にすらなつた

→古代史を研究するためのツール(言語学・生物学そして神学を含む)そのものが、現代の人種差別・民族主義への加担と抵抗の両方を含む

⇒一方「民族」という語は「人種」に比して、古代地中海世界への分析概念としてまだ比較的無批判に使われる傾向がある? (Buell)

【古代の「民族」概念の流動性】

実際のところ、「民族」概念も、「人種」同様の問題を抱える

民族性(ethnicity)は、ジェノサイド、植民地主義、奴隷制に用いられてしまった、特に生物学に基づいた人種の理解に代わるものとして20世紀半ばに造られた用語、

「人種」概念を参照せずに理解することは不可能

→「人種」「民族」概念の区別には、特に世界大戦、ホロコーストと公民権運動など、望ましいものとなった状況に照らして見なければならぬ??

→いずれにせよ、現代の「民族」概念と古代の「民族」概念は完全には一致しない

また結局のところ「民族」は、「人種」同様に生得的な、固定的な、不変の(血縁関係、母語、文化・宗教的出自 etc.)ニュアンスをも含む

→古代においては?

古代ローマの場合……「多民族」国家としての古代ローマは、血縁的な出自というよりも、むしろローマ市民としての生活慣習、社会的地位(市民権)、参与する宗教祭儀などを根拠に「民」を定義した(それこそ、宗教共同体としてのユダヤ教徒など?)

3. 「民族」としての初期キリスト教の検証に際して——論点の整理

先述の通り、「民族」性と「人種」の古代における定義は大きな問題

生得的な「本質」、つまり系図や親族などの手段を通じて追跡可能な性質を元に見た民族性(後天的に移動不可能、固定的)

↓

参与する宗教、運なり努力なりにより移動可能な範囲の社会階層(市民権など?)を元に見た民族性(後天的に移動可能、流動的)

西暦1世紀、2世紀、3世紀初頭には、キリスト教徒もユダヤ人も、(現代我々が思う固定的な属性としての)「民族」アイデンティティに必ずしも対応してはいなかった

さらに、両者の相互関係は動的であり、その境界はしばしばぼやけていた (Buell)

→キリスト教者が自分たちを民族と見做し、歴史的血統として自分自身を位置付けるという洞察は、古代におけるキリスト教とユダヤ教の関係の(より妥当な)理解にも寄与しうる

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください (紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。(

④川越菜都美「初期キリスト教徒における「民族」としての自己定義」(仮)日本聖書学研究所定例会、日本聖書神学校、2022年6月20日発表予定